



学歴社会がもたらした韓国の教育制度の現実

守屋留学生交流協会 第二十八回奨学生

柳銀珠

私

は韓国の釜山の出身である。釜山は韓国の南東部に位置しており、首都ソウルに次ぐ第二の都市である。また、韓国の主要な国際貿易港として古くから外国との文化交流の中心地として栄えてきた。現在では、国際貿易港としての役割だけではなく、国際観光都市としても注目を浴びている。

釜山は、特に日本人観光客が多く、日本語で書かれている店の看板も多くみられる。このように、以前から日本人の姿や日本語に慣れていたため、最初に日本に来た時は、まったく緊張することはない。異なる国や地域に行くとき緊張しがちである私だが、日本は「韓国とあまり変わらない」という印象を受けていた。

しかしながら、実際に人々や日本の生活文化に触れはじめてから、異なる点があるということに気がついた。特に、人によつて変わった場合でも「すみません」と謝ることにはとても驚いた。韓国では恐らく、ぶつかった人が謝るべきだという考えが強い。最初は理解できなかった。しかし、今では私もそれが習慣になり、ぶつかられても謝るようになった。また、電車や地下鉄の中の様子もかなり日本と異なる。日本では、寝ている人や本を読んでいる人が多い。韓国では、本を読む人は少ない一方、電話をかけたたり友達と話をしたりする人が多く、電車の中は、あまり静かでは

ない。日本人は「人に迷惑をかけない」という意識が強いということを知っていたが、実際に日本人と接してみると、確かにその通りであると感じることが多々あった。このような他人に対する配慮の気持ちは韓国人も見習うべきであると思う。これ以外にも、生活文化の様子や人々の価値観の違い等はまだまだ多くあるが、紙面の都合上ここまでしておく。

次

は、本稿の主題である韓国の教育事情について論じたい。特に、私が受けてきた教育と現在の韓国の教育事情との比較や、韓国と日本の教育に対する自分の考えを中心に述べたいと思う。

韓国の教育制度は1950年から初等学校、中学校、高等学校、大学の6・3・3・4制であり、中学校までが義務教育である。高等学校の中では、主に大学進学を目的とする普通高校と、就職を目的とする実業系高校（商業高校、工業高校等）の二種類がある。大学は、アカデミックな色彩の強い大学（4年制）や専門大学（2〜3年制）、産業大学、教育大学等がある。

私は大学を卒業するまで釜山で教育を受けてきた。現在の教育と比較してみると、変わったことが幾つかある。特に、第二外国語や英語教育に関しては異なる点があるので言及しておきたい。

まず第二外国語は、私の頃は高校生から習い始め、普通高校ではフランス語やドイツ語を学ぶ学校が多かったものの、学校ごとに指定されている外国語は異なっていた。しかし、現在はソウル市内の高校の90%が日本語を選択科目として開設するほど、日本語が重要な科目となっている。

英語教育に関しても、小学校の段階からネイティブによる授業をはじめしている点では以前と異なる。私の頃は、中学校から英語を習い始めたが、ネイティブの英語教師は一人もいなかった。中学校や高校での英語の授業は、ほとんどが試験のための学習で、単語や文法を必死に勉強したことしか記憶に残っていない。

このように変化した背景には、幼少期からの英語の早期教育が関係していると考えられる。幼少期から海外への語学研修や塾に通う人々が増え、それによる私教育費の増加や所得格差による教育投資の差異を防ぐために、国内でもネイティブによる授業ができるようにしたとみられる。

英語をはじめとしたこのような早期教育は、幼い頃からやっていると身につつきやすいという正しい側面もある反面、負の側面もたくさん存在する。特に、教育の両極化現象は最も深刻な問題である。経済的にあまり余裕がない場合は、早期教育を受けさせるのが難しい一方、経済的に余裕がある場合は、幾つかの塾に通い、友達と遊ぶ暇もないほど勉強に時間を費やす。また、英語に限らず、中学校で習う内容を小学生の段階で習得し、中学校では、高校の学習内容を終わらせるというのが実際のところである。親の中にもこのような教育をさせるのはよくないという自覚を持つ者もいるものの、他の子どもとの競争に勝つためにはそうせざるを得ないのが現状であるといえる。

このような厳しい競争は早期教育だけではなく、高校や大学の受験にも同様にみられる。政府は名門高校に集中する受験戦争と人口の都市集中、塾通い等の弊害に対処するために、1974年から「高校平等化制度」を導入した。この制度は抽選で生徒を割り当てることによって学校間格差をなくしたのだが、今度は地域間の格差をもたらした。抽選方式は、居住地と近い高校に割り当てられる場合が多い。特にソウルでは、教育環境の整っている中心部地域に人々が集中する問題が発生した。他の地域に住んでいる人が子どもの教育のために引越をしてくる場合も少なくない。このような現象は地方よりもソウルによくみられ、近年はこれを解決するために、新たな動きが出ている。

未だ決定事項ではないが、今年からソウルに住んでいる中学生は、抽選方式ではなく、自分が行きたい高校を選択できるようになる見込みである。これに伴い定員に対して入学希望者が少ない学校には行政的、財政的な支援が与えられる予定である。この制度は、教育環境のあまり整っていない地域に住んでいる学生も居住地とは関係なく、評判のいい学校に進学する機会を与え、機会不均等問題を解消することが目的である。

韓国の高校進学において日本と最も大きく異なる点は、前述した抽選方法で学校が決まるということであろう。もう一つ高校の学校生活で日本と異なる点がある。それは学校滞在時間の長さである。大学進学を目的とする普通高校では、学校で夜22時頃まで勉強するのである。授業はたいして17時で終わり、それ以降の時間は自習時間となっている。これは制度として定められており、特別な理由がない限り学校で勉強しなければならない

のである。これも、私教育費をなくすための制度の一つであると思われる。私も3年間同じように夜遅くまで学校で勉強していた。しかしながら、これはあまり効率的ではないと感じている。なぜなら実際、自習時間にまじめに勉強する人はあまりいない。隣の人とおしゃべりをする人や漫画を読んでいる人、寝ている人が多かったような気がするからだ。私もこの制度のために、毎日睡眠時間が5時間ほどしか確保できず、よく自習時間に寝てしまい監督の先生に怒られた経験がある。もちろん、勉強することはとてもいいことであるが、毎晩遅くまでの自習時間のために疲れ果て、大切な授業時間には居眠りするのは元も子もない。本当に良い教育制度であるのか未だに疑問である。

一方、大学の受験はどうだろうか。韓国では、大学に入学するために大学修学能力試験（略して修能）を受ける。この試験は、日本のセンター試験に相当するものであり、統合的な思考力を測定するために1994年度から導入された試験である。毎年11月に行われるこの試験の日は、地下鉄やバス等の交通機関が増便されたり、出勤の時間を1時間遅らせたりする。遅刻した学生のためには救急車やパトカー等が待機している。

また、受験当日には、朝早くから各高校の後輩たちが朝食を準備し、応援してくれる光景もみられる。さらに、凍てつく寒さにもかかわらず、試験が終わるまで親は自分の子どものために学校の正門の前で祈る姿もみられる。

韓国の学生たちは結局この試験のために、12年間勉強してきたといっても過言ではない。なぜならば、韓国は日本のように大学別に実施する2次試験が存在しないため、受験生はこの試験で良い

成績を出せば名門大学に入学し、そのまま有名企業に勤める道が保障されるからである。この試験で良い成績をあげるために、経済的な余裕がある家庭では大金を投じて家庭教師をつけ、徹底的に試験の準備をする。

ここまで、韓国の教育事情や、受験戦争、韓国と日本の教育や学校生活の様子の差異等について述べてきた。

このような、韓国の異常な教育熱と受験戦争の背景には将来を左右する「学歴社会」という現実がある。学生たちは高学歴を得るために、受験戦争に直面しなければならない。そのため現在では、韓国の高校生の83%が大学に進学するほど、あらゆる階層を通じて日本以上に高学歴志向が強い。

「学歴社会」が完全に悪いとはいえないが、この現状は様々な影響を及ぼしている。例えば、学歴と学力を同一視し、出身大学だけで人を評価してしまう傾向がある。また、その評価のもとになる大学受験に必要な知識や能力は、断片的な知識を暗記したものであり、このような知識や能力だけを評価の対象にする社会では、創造的思考力の向上を阻害する可能性がある。これらの影響は日本にもみられる傾向であり、日韓両国が共通して抱える問題である。

教育に正しい答えを見つけることは難しい。どんな教育制度であっても何らかの弊害を抱えている。大事なことは、現在直面している教育の弊害を少しでも減らす努力である。教育は学歴を得るための手段ではなく、自由な選択で多様な内容を学ぶことである。その学習の結果を評価し、認めてくれる社会になることが必要であろう。